

田山花袋『満鮮の行楽』の戦略

水野達朗

一、好意的な旅行者

田山花袋は大正一二年の三月から六月まで、満鉄（南満州鉄道株式会社）の招聘で「満州」と「朝鮮」を旅行し、翌一三年、『満鮮の行楽』を刊行している。『満鮮の行楽』に関しては「日本の軍国主義政策による満州への侵略と朝鮮併合を肯定」したことが指摘される反面、「朝鮮の美しい風景には完全に心を奪われた」ことが好意的に記述されるなど評価がわかれる。これらは、『満鮮の行楽』の特定部分に対する批評であり、しかも植民地に対する認識の内容を、直接的に問題にしている。しかし、この書物がどのような性格を有するか見極めるには、朝鮮観（満州観）の内容より、具体的な事物を表現する際の手法・戦略に注目し、これが全体を通してどのように展開されているのかを検証する必要があるだろう。そうして初めて、この書における朝鮮観（満州観）の政

治的な含意も明らかに出来る。

（以下花袋の引用は『定本花袋全集』全二八巻（臨川書店、一九九三～一九九五年）から行う。『満鮮の行楽』は二八巻、『第二軍従征日記』は二五巻、その他紀行文は一六巻からの引用であり、本文中に頁数を記す。漱石『満韓とところどころ』の引用は、『漱石全集』第一二巻（岩波書店、一九九四年）から行い、やはり本文中に頁数を示す。）

花袋は『満鮮の行楽』の冒頭で、満州の人力車の印象を記している。苦力が安い賃金で働くので運賃が非常に安いことに花袋は目を瞠る。「内地のと違って、車の底が低く、柄が長く、ぴたりと体がくつつくやうに出来てゐるので、如何にも乗心地が好かつた」とも花袋は記す。「内地の車夫のやうにわるく贅沢化してゐない」ので、「平気で何処まででも走るところにも、好感を抱いている（四～五頁）。満州や朝鮮

の人力車に関しては、夏目漱石が『滿韓とところどころ』（明治四二年）で、「無人の境を行くが如くに飛ばして見せる」ので「我々の様な平和を喜ぶ輩は此車に乗つてゐるのが既に苦痛」だと記していた。「御者は勿論チャンチャンで、油に埃の食ひ込んだ辮髪を振り立てながら「……」と、その汚さに対する嫌悪感を露骨に示してもいる（三三六頁）。この車夫（苦力）に対し、花袋はその低賃金を思いやる優しさを示し、漱石が「苦痛」とした車の「乗心地」の良さを強調し、漱石が驚いた乱暴な走行も好意的に見ている。ここで花袋は、漱石を意識しながら、あえてその逆を行こうとしているようにも見える。冷笑的な漱石の姿勢に対し、思いやりと理解力のある旅行者像を、あえて提示しようとしているのではないかと思われるのである。

この行き方は、他の部分の記述にも窺える。花袋は大連に關し「満鉄が思切つて金をかけただけあつて」大変感じの好い町で、これほど整然とした市街は「内地の何処にも」ないと記している（二三頁）。高等工業学校と中央試験所でも、建物の宏壯と規模の雄大をたたえ「内地でも、否、東京でも、かうした設備は容易に見出すことは出来ない」と言う（二二頁）。工場を見学した際には、機械の回転や鉄の溶解に「立留つて眺めずにはゐられなかつた」とか「目を睜はらずにはゐられなかつた」とか記す（二七頁）。ここでも花袋は人力

車の時と同様、「内地」と比べて満州が優れていることを強調するが、ここではそれが満鉄の植民地経営を称えることに繋がっている。これに対し漱石は、「東洋第一の煙突」を有するという工場を見学しても、「成る程東洋第一の煙突を持つてゐる丈に、中に這入ると凄じいものである」と皮肉な口調で語り、「尋常の会話は到底聞えない位に、恐ろしい音が響いてゐる中に、塵を浴びて立つた時は、妙な心持」だとか、「只凄まじい音を聞いて、同じく凄まじい運動を見たのみ」だとか、辟易した様子をあからさまに示している（二二二頁）。

即ち漱石は、満州の苦力に嫌悪感を示したのと同様、満鉄の事業に対しても冷笑的であるのに対し、花袋の場合、苦力に思いやりを示した態度が、満鉄の経営に対する理解として表れている。このように両者は共に両義的であり、その「満州観」を簡単に評価することはできない。満鉄に招聘されて来た両者は、内地に満鉄の広報をする役割を期待されていたと考えられ、そこで関係者から多くの「説明」を受けるが、これに対し花袋は「私の知識をもう少し豊富にして置きたい」（二二頁）と乗り気で、「いろいろと説明して呉れたので「……」について新しい知識を得ることが出来た」（五〇頁）と感謝している。これは、満鉄調査課長が「説明」しようとした際、自分は「何を調べる程の人間でもないんだから」困つたと韜晦している（二九〇頁）漱石の態度とは、やはり対照的であ

る。花袋は満州で、何事にも前向きな姿勢で臨む。しかし、凝視したはずの事物や、喜んで得たはずの「知識」を詳述することはなく、ひたすら、前向きな「姿勢」を示す言葉だけを通ねるのである。

このように花袋は、先行する『満韓ところどころ』を意識し、その逆を行こうとしていたように見えるが、両者の違いは、日本が植民地経営に踏み出した直後と、それが軌道に乗り始めたあととの違いを示唆してもいる。『満韓ところどころ』では、植民地経営という事態になじめず戸惑う気分が感じられるが、『満鮮の行楽』では、それは既に「自然」なことと化している。花袋が中国東北部を訪れたのは、日露戦争従軍の際に続き二度目である。このとき花袋は従軍紀行『第二軍従征日記』（明治三八年）を著した。『満鮮の行楽』を書く花袋が、漱石の書だけでなく、自分の『第二軍従征日記』をも想起し、時代の変遷に思いを致したであろうことは想像に難くない。『第二軍従征日記』には次のような記述がある。

春、実に春だ。よく見ると、桜ばかりではない、畑には黄菜の花。桃の花。江流の緑はえも言はれぬ趣をこの下り行く両岸の山々に添へて、これが戦争に行く船でなかつたなら、悠々旅行して仔細に風物の美をた、へること
[…]

海軍の軍艦が水雷艇と相前後しつゝ、勇ましくこの怒涛の中を航走するさまと言つたら「…」先づ第一に、海門艦、第二に、宮古艦、第三に、摩耶艦、第四に筑紫艦とそれが正しく縦列を作つて、極く低い速度で走つて行く
と「…」
(六〇〜六一頁、傍線引用者、以下同様)

「戦争に行く船」の上にいる発話主体は、風景の美を詳しく報告しない。彼が嬉々として伝える光景は、軍艦の進行など、すべて戦争にかかわるものである。風景の美は、戦争の場にいるという現実の彼方に、微かに憧れ見られるに過ぎない。これに対し、『満鮮の行楽』における花袋は、「金州南山」のところ次のように記している。

あたりには以前の面影は全くなかつた。私は赤ちやけた丘の代りに背の低い松の林の連続を見た。疎らな灌木の林の日に照らされてゐるのを見た。梢深く小鳥の囀つてゐるのを見た。これがあの南山だらうか？あの煤はきの時に畳を叩くやうないやな敵の機関銃の音で満たされた
同じ南山だらうか？
(八四頁)

以前は戦場だった場所で、緊迫した戦時の空気が消え、気の抜けたような平和な風景を眺める主体は、『第二軍従征日

記」とは逆に、戦争の光景に思いを馳せる。戦争の時は、平穩に風景を眺めることを望んだものの、いざそれが実現すると、あまりの平穩さに虚脱してしまうのである。そのように虚脱した状態、既に何かが終わつた状態で、全てを好意的に眺め受け入れる旅行者像を、花袋は『満鮮の行楽』で提示しているのである。

二、朝鮮の美の発見まで

花袋は明治二〇年代から三〇年代にかけ「紀行文」作家として活躍した。花袋を文壇主流に押し上げた明治四〇年前後の「自然主義」時代、紀行文でも「美辞・美文からの離脱」が叫ばれ、「対象の忠実な描写」と「視点者の内面」が志向されるが、そこで花袋は皮肉にも「古い紀行文家」として扱われる。ただ紀行文作家花袋は当初から、「事実性への傾斜」と共に「主人公『花袋』」の図式を採用していた面もあるし、紀行文の革新を受けて花袋自身も変化し、以後の紀行文で描写と内面への志向を強めていく面もあるだろう。大正一三年の『満鮮の行楽』でも、風景を見る「視点者」（「私」）の感性に、焦点が合わされているのは確かである。

『満鮮の行楽』の中で最も記述が充実しているのは、金剛山の部分である。しかし金剛山を歩く「私」は当初、この山に不満を抱いていた。「山も溪谷も路の通じてゐるところも

すべて岩石で出来てゐる」ので、岩から岩へと渡り歩かねばならず、「日光や、紀州や、アルプス」と違い、「一とところでも平らな黒い土の上を踏むことなど出来なかつた」というのである。そこで「私」は、金剛山は「岩石で一杯に満たされてゐる溪谷と言ふだけ」だと思ふ（二六七―二六九頁）。また、岩の間を水が流れ落ちて来るのを見て、「私」は「水が少いな！」と思い、口に出しても言う。「私達内地に住んでゐるものは、溪流と言へば、すぐ激越憤越して流れ落ちて来るさまを想像」するが、「水量が多くなくては、何となく物足りないやうな心持がする」というのである（二六七頁）。このように「私」は、金剛山を「内地」の山と比べ、岩ばかりである点と、水の量が少ない点とを、欠陥として挙げていくことがわかる。

更に花袋は、日本の山は「山口から奥迄入つて行くのに中々容易でなく」、「奥深く蔵されてあるがために「∴」山の深さを一層多く感じさせられる」が、金剛山は「すぐれたサインがそれからそれへと惜し気なく続いて展開されて来るので、却つてそのため浅くなつて了ふ」と言う（二六六頁）。奥まで辿り着くのが容易でないという日本の山の特色は、例えば日光の深澤に関する記述では、次のように表現されている。

「…」また秋の紅葉、林を透して、溪水の轟きわたつて来るさまは、何うしても、日光の烈しい山の氣象を人々に思はずには置かない。それから入つて行く一歩一歩、あの深潭の深潭からかけて、般若、方等二瀑の濁下した大きな溪谷を経て来た谷や、「…」二十四重の峻阪をのぼりつくした大平の白樺の林、やがて華嚴の瀑声のきこえて来るあたりは、日光の絵巻の中で殊に「…」

(九〇頁)

「轟きわた」るほど「瀑声」を響かせる「水量」を重視しているが、それより傍線部のように「私」の移動につれ、見える風景、聞こえる音が変化していく様子自体に強い印象を受けている。この特徴は、塩原の箒川を描いた次の記述にも表れている。

溪が幾重にも綾の如く曲り曲つて、次第にその奇をあらはして来るのが好い。俯しても容易に見ることの出来な^いあたり^に、水声が微かに咽んで、樹木の緑の漲つた底に、纔に深潭の髣髴を認め得る形も、旅客の心を惹くに十分であつた。

(九三頁)

こゝでも「深潭」の水量を重視しているが、それも、隠れ

ていた豊かな水量がほのかに姿を見せる様子に、興趣を覚えるからである。日本の山の「深さ」を花袋が評価するのもこのためといえる。また紀州瀨八町でも、「碧い碧い深潭」「沈々として声なき深きその静潭」（一〇四頁）を称え、「深山の幽邃な気分」（一〇五頁）「滅多に世間に俗了されて了はない山水」（一〇九頁）を堪能する。また猊鼻溪でも、溪が屈曲するにつれて、「思ひもかけない奇巖」が現れ、「思ひもかけない幽邃な気分」が出て来る（一四一頁）意外性と深遠さにいたく感銘を覚えるのである。花袋は金剛山で、日本の山に見られる良さが、全く欠如していることに對し、不満を覚えたと考えられる。

しかしこのあと、「批評がましき心を持つて天然に對するといふことが、そのことが已に間違つて」おり、「比べて考へて見たりしない方が好い」と、「私」は急に自分の見方を反省し始める。そして「日本アルプスは日本アルプス、日光は日光、此処は此処といふ風に、十分にそれを受け納れるやうにしなければ、天然だつて、本当のものを見せて呉れはしないからね？」と、日本と「此処」の良さをそれぞれに認める必要性を語る（二六九〜二七〇頁）。留意したいのは「私」が、現実に「此処」の良さを見た結果としてこの認識を得たのではなく、意識的に「此処」に對する認識を転換しようとしているという点である。実際、以後の感想は、好意的なも

のに変化していく。

例えば万瀑洞の入口で「両側の岩山が見事」と称え、「綺麗な碧い水」が岩の上を流れるさまに見入るなど、先に欠陥と見た特徴を、逆に評価する姿勢に転じる。「何処の溪谷がこれに匹敵するであらうか」と自問し、「瀨八町か？ 猊鼻溪か？ それとも塩原の箒川の溪谷か。日光の深沢か？」と日本の溪谷を想起する（二七三頁）。

皆ながそれからそれへと岩石を踏んで行くやうにした。次第に岩石と水と戦ひ合つてゐるさまが、その美しさを、その見事さを、その巧さをあたりに展げた。場所に由つては、かなり高い滝津瀬をつくつてゐるやうなところもあれば、滑らかな褐色の一枚岩の上をさらさらと爽かな流れに落ちてゐるやうなところもあつた。私達の心はいつとはなしに全くその山水に引き寄せられて行つてゐた。

（二七四―二七五頁）

ここでも認識の変化は、歩行につれて眺望が変化し、多様な光景が見えてきた結果として提示されている。日本の風景を記述するのと同じ文体が、漸く金剛山にも適用されたのである。しかし、提示される「美」は、日本のそれとは正反對であり、眺望の変化も実は、観察者の態度の変化によるもの

である。「誰も彼もはやあたりの風景について批評がましいことは言はなくなつてゐた」（二七五頁）とあるのも、美しい風景が見えたから自然にそうなったように書かれているが、実は、「批評がましき心」では自然の美は理解できないと反省した、先の記述と呼応している。

内地の溪谷のやうに、水量があまり多くつては、また底が土か粘土では、到底かうした奇景を呈することは出来ないといふことが次第に私達にもわかつて来た。従つて此処では、水の少いのを決して憂ひとはしてゐないのであつた。水が少ければこそ、底が石であればこそ、この美しい潭が自然に出来て行つたのであつた。（二七五頁）

岩が多いこと、水が少ないことは、「内地」の基準では欠陥となるが、別の視点から見れば「美」の要素となる。そのやうに、美の基準は複数あることに「私」が気付いていく過程が、提示されるのである。花袋は「内地の何処にかうした面白い潭があつたであらうか」（同頁）と、「内地」の山をひと括りにし、これとは全く異なる価値を金剛山に認めている。即ち「内地」と朝鮮を、相対的に認識しているのである。

『満鮮の行楽』の金剛山の部分に関しては、「金剛山近辺の風景を旅行者の眼で勝手に評釈」したものだという意見が

ある。しかし以上の検討を踏まえると、そのような「勝手な評釈」を自ら批判的に捉え直し、克服していく過程こそが、『満鮮の行楽』には描かれているとわかる。他方、金剛山の部分ではないが、朝鮮の動物園は上野に劣らない、などと朝鮮文化の価値を認めた花袋の言葉を「素直な開かれた感性」と評価する見方もある。金剛山が「内地」の山に劣らないことを認めた所にも、同じことが言えるように見えるが、金剛山に対する評価は、「素直な」感性の産物というよりは、逆に、意識的に価値を反転させようとする、知的な努力の結果なのである。意識的な（無理な）努力であることは、帰り道で再び、「これだけなら、金剛山もさう大してすぐれてはるない」、「深山の気分に乏しく」日本アルプスのような「幽邃な感じを求めることは出来ない」（二八三頁）と、以前の認識に回帰している点からもわかる。『満鮮の行楽』では確かに、観察者の内面に焦点が合わされているが、内面が自然に（率直に）吐露されるのではなく、金剛山に対する観察者の感性は、自己照射的に対象化され、意識的・方法的に構成・提示されているのである。

三、両義的な戦略

このように花袋は、「内地」の山と金剛山とを、別の基準で評価し、特に金剛山の方を好意的に見ようと努力している。

この描き方は、満州の部分で、『満韓ところどころ』の漱石と異なり、植民地の風物を好意的に紹介しようとし、結果、満鉄の植民地経営をも賛美することになっていたのでとも通底する。植民地の事物に嫌悪感しか示さない漱石が、満鉄の経営努力にも懐疑的であり得たのとは対照的に、相手の側に立ち親身な理解を示そうとした花袋は、植民地支配を含め全てを肯定することになった。冒頭に見た通り『満鮮の行楽』に対する評価が分かれるのは、花袋の姿勢が孕む両義性のうち、片方だけを取り出したためである。

花袋は『満鮮の行楽』で、『満韓ところどころ』や自らの『第二軍従征日記』、国内の紀行経験などを意識しながら、植民地に対する認識を意識的に転倒・更新しようとしており、この作品の性格を理解するには、花袋の戦略の全体を視野に入れなければならない。

では花袋はなぜ、そのような方法を用いたのだろうか。金剛山は、総督府も観光宣伝に力を入れており、花袋が『満鮮の行楽』を書いた時点では、観光案内や旅行記の類も既にかなり存在した。『金剛山遊覧の葉』（朝鮮総督府鉄道局、大正四年、以下①）、徳田富次郎『金剛山写真帖』（徳田美術書院、大正六年四版「大正元年初版」、以下②）、今川宇一郎『朝鮮金剛山大観』（大陸踏査会編集部、大正三年、以下③）、竹内直馬『朝鮮金剛山探勝記』（富山房、大正三年、以下④）、菊

池幽芳『朝鮮金剛山探勝記』（洛陽堂、大正七年、以下⑤）、大町桂月『滿鮮遊記』（大阪屋号書店、大正八年、以下⑥）、沼波瓊音『鮮瀟風物記』（大阪屋号書店、大正九年、以下⑦）などである。これらを視野に入れることで、同時代における花袋の位置、即ち、花袋の戦略が当時有した相対的な意義を明らかにできるだろう。

花袋の記述内容自体は、金剛山をめぐる当時の言説の中で、特に独創的なものではなかった。万瀑洞に注目することがまず、花袋も「内金剛の中で一番すぐれてゐると云はれてゐる万瀑洞」とし、「成程それはすぐれた山水だ」と言う（二七三頁）通り、既に定着している評価を想起し、追認することを意味した。各種刊行物にも実際、「金剛内山に於ける勝中の勝」（②）、写真「万瀑洞口」（説明）、「万瀑洞裏の観、蓋し内山第一」（③）、写真「二二万瀑洞口の観」（説明）、「金剛における溪水美の主体」（⑤）、一一八頁）、「最も能く金剛山の特色を發揮」（⑥、二五頁）等とある。

花袋は万瀑洞の入口で、前節に見た通り、「両側の岩山が見事」と称えた。これに關しては、「左方は青鶴台の奇岩、触るれば墜ちん勢をなし、右側は急湍転石を啣むで水声高く、其涯渚より屹立せる蒼壁幾何の五賢連峰は北に走せて」（①、一七頁）、「東方の削壁は法起峯の連屏にして西方は獅子峯より打続く崔嵬峩々たる乱山奇峯」（②）、写真「万瀑洞口」説

明）、「青鶴、香炉五賢、獅子等の諸峰奇形異状を呈露して余さず、層々疊々聳翠繚白、真に象美の総会所たり」（③）写真「二二万瀑洞口の観」（説明）、「左岸に屹立する高峰を青鶴峯右岸に並立するを五聖峰と云ふ」（④、六二頁）、「十数町の間兩岸は多く数百尺の懸崖をなし」（⑤、一一七頁）、「青鶴の一峯、寺を圧し、墜ちむとして墜ちず」（⑥、二二頁）、「殿のうしろより右へ、五賢峰、青鶴台、七星台聳え並ぶ」（⑦、二五二頁）と各書にある。

花袋はまた、岩の上を滑る「綺麗な碧い水」にも注目していた。これに關しても、「幾条の銀線縞を為して白光を放つは、岩面を滑り落つる糸の如き細き水流の朝日に反映するなり」（③、一〇頁）、「清冽珠の如き溪水は幾十の飛瀑をなして奔流し」（⑤、一一七頁）などと水流の美しさに注目した記述がある。花袋が「かなりに高い滝津瀬をつくつてゐるやうなところもあれば、滑らかな褐色の一枚岩

『金剛山写真帖』（②）より「万瀑洞口」の写真（部分）

の上をさらさらと爽かな流れに落ちてゐるやうなところもあ

つた」とした溪流の多彩さに關しても、「洗頭盆、影娥池、黒龍、琵琶、碧波、噴雪の諸潭或は奔騰激越、或は静寂幽玄、天地亦人界にあらず」（①、一八頁）、「山腹を覗きつ、進めば、出没変幻極りなき山水は銀蛇の怪石を咬むが如きあり、巨石の堰を衝き破つて迸ばし出づる溪流あり」（③、一〇頁）、「溪流の奔湍は騰りて瀑布となり落ちて潭となる〔…〕真珠潭と云ふあり飛泉迸射珠を散す潭面皎々として光輝あり〔…〕亦船潭と云ふあり奔湍の飛瀑となり大磐石上に落ち〔…〕」（④、六二頁）、「万瀑八潭は青龍、黒龍、碧波、噴雪、真珠〔…〕」（⑤、二二三頁）、「溪流は懸りて瀑布となり、溜りて潭となる。〔…〕都合八潭なり。」（⑥、二四頁）「所々溪流、瀑布となつて落ち、其落ち口稍深くして潭をなす。〔…〕万瀑八潭と称す。」（⑦、二五二―二五三頁）などと記述されている。

万瀑洞の岩の見事さ、水流の美しさ、見事さを評価したことと自体に關しては、このように既に言い尽くされていたことの追認といえた。しかし、これらは皆、漢文脈を中心とした文語体（⑤は言文一致だが文語脈が顕著）の美辞・美文で書かれ、表現にも型があり、殆ど全く同じ文言が複数の書に見られることさえある。これらと比べると、花袋の文体はかなり口語的であるし、対象に対する個人的な反応が具体的に伝

わるように書かれている。

とはいえ、個人的な視点を打ち出すこと自体は、他の諸書にも見られる。総督府が作成した觀光案内であり、客観的な記述に終始している①でさえ、「表訓寺を出て溪流に沿ひ上ること幾何ならずして、呀然たる天然石の金剛門あり、左方は青鶴台の奇岩、〔…〕右側は急湍転石を嚙むで〔…〕往く手稍開けて溪流三叉を為すところ、〔…〕左して香炉、青鶴二峰の間を溯れば〔…〕」（一七―一八頁）と、人の進行とともにひらけてくる景色を、順に記していく体裁が取られている。③になると、「早朝表訓寺を發し、若き五葉松の樹林を縫い行く事四五町、二つの巨石山形に喰ひ合ひて自然の石門を為す、金剛門と云ふ。〔…〕我れに返れば身は全く道なき巨石の間にあり、僅に一方の通路を見出し青葉茂れる山腹を覗きつ、進めば」（九―一〇頁）と、殆ど同じ体裁ながら、特定の「早朝」、「我れに返」つたり山腹を「覗」いたりする身体の動きが書き込まれ、観察者の個人的な存在が浮上する。⑤では「私はお寺の中で午睡の夢を食つた。二時ごろ雨が止んだといふので起され、表訓寺の坊さんに案内され〔…〕溪流に沿うて上つて行くと〔…〕」（二一六頁）と、「私」の姿がより明確にされている。同時に、「金剛における溪水美の主位を占むるもの実にこの万瀑洞を推さねばならぬ。それは〔…〕ためである。〔…〕靈源洞水簾洞の峡谷に比して、

多少幽邃の度を減ずる事は云ふ迄もない。私は万瀑溪の雄大を説いたが、殊にこの溪に雄大の観を与える要素の一は「……」（二一九―二二〇頁）と、「私」が何がなせ「美」なのか思弁をめぐらし、しきりに「推」したり「説」いたりする。ここでは、「美」を評価する際、金剛山の「洞」を互いに比べているが、⑥では次のように日本の山を持ち出している。

人往々問うて曰く、『金剛山は耶馬溪に比して如何』と。

「……」耶馬溪は溪也。「……」高きも三千尺を出でず。「……」

金剛山は山也。「……」高さ五千四百尺「……」。若しも『金

剛山は富士山と比較して如何』と問ふ者あらば、余は先

づ答へて曰はむ、『富士山は正々堂々の極なり。金剛山

は奇々怪々の極なり』と。富士山は火山なるが、金剛山

は火山に非ずして花崗岩の山也。 （二―五頁）

⑥の大町桂月は紀行文家として知られるだけあり、山の評価も他の山の知識を動員して精緻に行う。しかしここで桂月は、金剛山と日本の山を、高いか低い、火山かそうでないかなど、日本の山どうしを比べる時にも使用できる、明快な指標により比較する。これに対し花袋は、日本の山を評価する時の基準では金剛山の美は評価できないと反省し、別の基準を編み出している。岩が多く水が少ないことは、「内地」

の基準では欠陥だが、金剛山の場合、そこそが美の要因になるのである。これは⑤が、万瀑洞を推す理由を「水の量が多いため」と説き、終始、日本の基準で評価しているのとも対照的である。金剛山に関する著作群は皆、金剛山を個別的な存在として捉えており、⑥もまた金剛山と日本の山を個別的に比較する。他方、花袋は日本の山をひと括りにし、日本的な美の基準を体现するものと捉える。これに對置される金剛山は、いわば「朝鮮の美」を代表することになる。ゆえに、他の著作は固有名詞を多用するが、花袋は殆ど用いないのである。

石崎等氏は花袋の「朝鮮」旅行に関し、『満鮮の行楽』でなく、朝鮮を描いた「長流」「石窟」等の短篇を分析し、花袋が「〈大きな歴史〉の国際関係や他民族の問題」を無視し、個人的な「〈小さな〉歴史」への固執を示していると指摘する。そしてこの旅では、「ハルピンにいる時子という旧知の女との秘密の再会という欲望と、帰国後、愛人（代子）としめし合わせた国内旅行への期待と愉楽とが揺曳していて、その体験は浮ついている」ため、「異郷でも自己認識と他者認識とを徹底化させることはなかった」と言う。しかし、現実の旅の際花袋が「浮ついて」いたこととは関係なく、『満鮮の行楽』には、「自己認識と他者認識」をめぐり、相当に知的・意識的な構成が認められる。個人の感性に素材に依拠し

ているのではなく、むしろその感性の根拠を問おうとしたのである。

そうした模索を通し花袋は、植民地の「他者」に理解を示すようで、実は植民地支配の事実を自明のものとし、また、金剛山という個別的な存在を捨象し、「朝鮮の美」という抽象的な枠の中に封じ込めている。しかし、金剛山に関する同時代の書物が、金剛山を個別的な存在として扱いかわり、全く違和感を覚えることなく、日本の山と同様、記述に取り込んでいたことを考えれば、花袋は、植民地支配という大枠の中でではあれ、「内地」とは異なる価値の存在に気づき、これを最大限に認めようとしていたともいえる。『満鮮の行楽』の花袋にとり、植民地の風物が宿す「朝鮮の美」も、観察する自己の内面も、所与のものとして存在していたのではなかった。だから、それらを見出していく過程を記述すること自体に、先行する言説の認識を更新する、戦略的な意義があつたのである。

注

- 1 馬京玉「花袋の紀行文学と歴史小説との接点としての一方法——『満鮮の行楽』を手掛かりに」『花袋研究学会誌』二〇〇二

年三月、五頁。

- 2 朴春日『増補 近代日本文学における朝鮮像』（未来社、一九八五年）一四一頁。

- 3 佐々木基成「〈紀行文〉の作り方——日露戦争後の紀行文論争」『日本近代文学』二〇〇一年五月、三〇～三三頁。

- 4 宮内俊介「初期田山花袋論——紀行文と小説との谷間——」『芸文研究』一九七七年、二二四～二二九頁。

- 5 榎本隆司「紀行作家としての独歩と花袋」『国文学』一九八二年七月、一五八～一六〇頁。

- 6 谷口智彦「欄木寿男『田山花袋と小林秀雄の朝鮮紀行文』について」『朝鮮研究』一九八一年一〇月、四八頁。

- 7 欄木寿男「田山花袋と小林秀雄の朝鮮紀行文」『海峡』昭和五六年五月、五六頁。

- 8 石崎等「〈満鮮〉への旅——大正期における桂月・花袋の異郷体験——」『立教大学日本文学』二〇〇二年七月、三三～三四頁、三六頁。